

2025年度 核融合科学研究所スクーリング・ネットワーキング事業
実施報告書

人的交流			
実施責任者	所属機関・部局： [REDACTED]	職名・学年： 修士2年	氏名： 大久保 洗佑
実施責任者連絡先	電話： [REDACTED]	E-mail： [REDACTED]	
派遣期間	2026年 1月19日 ～ 2026年 1月24日 (6日間)		
交流先機関及び 受入責任者	機関等名：スペイン国立エネルギー・環境・技術研究センター (CIEMAT) マドリード工科大学 (UPM) 受入責任者名： [REDACTED] E-mail: [REDACTED]		
得られた成果等 (行数は適宜増や してください)	<p>1. 本事業によって得られた成果のうち特筆すべき事項 CIEMAT および UPM の研究者・学生と専門的議論を重ね、核融合材料研究に関する国際的研究ネットワークを構築するとともに、国際舞台で研究を遂行するための基盤の能力を養うことができた。研究発表および質疑応答を英語で実施し、異なる研究背景を有する研究者から多角的な指摘を受けたことで、自身の研究課題を客観的に再整理する機会となった。特に、実機環境を強く意識した研究設計や評価思想に触れたことは、材料特性評価中心であった自身の視点を拡張し、研究の社会的・工学的意義を再認識する契機となった。また、若手研究者との継続的な情報交換体制を構築できたことは、今後の共同研究や相互訪問へと発展しうる人的基盤の形成につながるものである。</p> <p>2. その成果が核融合分野の人材育成に果たした（果たすと期待される）事項 本交流を通じて、海外研究機関との専門的議論を英語で実施し、研究課題を国際的視点から再構築する経験が得られた。特に、実機環境を意識した研究設計や評価思想に触れることで、核融合炉材料研究を工学的・体系的に捉える視点を養うことができた。さらに、研究者間で継続的な情報交換体制を構築できたことは、将来的な共同研究や若手研究者の相互育成の基盤形成に資するものであり、核融合分野において国際的に通用する人材育成への足掛かりとなることが期待される。</p> <p>3. 交流先研究者（グループ）の熱意、態度、研究レベル等に関して参考となる事項 CIEMAT および UPM の研究グループは、教員・学生間の隔たりが小さく、日常的に活発な議論が行われている点が印象的であった。研究発表時には専門分野の異なる研究者からも具体的かつ建設的な質問が寄せられ、課題の本質を掘り下げる姿勢が共有されていた。また、設備運用やデータ取得は標準化・体系化されており、研究を効率的かつ再現性高く遂行する体制が整備されていた。学生も主体的に議論へ参加しており、若手育成を重視する研究文化が醸成されていると感じられた。</p> <p>4. 今後改善すべき点について参考となる事項 短期滞在では研究内容の詳細な検討や共同研究計画の具体化まで至ることが難しい。派遣期間の柔軟化や中長期滞在枠の拡充に加え、帰国後のフォローアップ訪問などを支援する制度を整備することで、単発交流にとどまらない実質的な共同研究創出へと発展させる仕組みの強化が望まれる。</p>		

	<p>5. 本年度に引き続き次年度も同じ目的（あるいはそれに準ずる目的）で派遣を計画している場合、本年度の派遣と異なる点及びその理由 次年度は自身の派遣を計画していない。</p> <p>6. 交流の概要、特に重要な課題などについて 本交流では、CIEMAT および UPM を訪問し、研究発表、研究施設見学、少人数での専門的な意見交換を実施した。自身の研究内容を英語で説明し、多様な研究背景を有する研究者・学生から質疑を受けることで、研究の位置づけや意義を再整理する機会となった。重要な課題として、短期滞在では相互理解の深化や共同研究構想の具体化まで十分に到達することが難しい点が挙げられる。一方で、若手研究者間の継続的な情報交換の基盤を構築できたことは、将来的な連携強化に向けた第一歩であり、人的交流を研究発展へ接続するための継続的対話の重要性が明確となった。</p>
備考	